



五感で楽しめる“園芸”から花開く 障害者の自立のかたち

名古屋市 特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム

Interview Vol.6

CASE5
NPO・団体等による農福連携



事例動画はこちら | <https://youtu.be/nvfvrzDJxRY>



Interviewee

田村 亨さん
松野 裕一さん

特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム
理事/事務局長
社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮
主任職業指導員

(特非)花と緑と健康のまちづくりフォーラムは、植物と接し、栽培する楽しみや喜びを共有する「園芸福祉」の一環として、農福連携を推進しています。障害者が自立し、幸せに暮らしていけるよう、障害者に寄り添い、共に歩んでいます。

愛知県で園芸福祉の活動と普及を図るNPO法人

(特非)花と緑と健康のまちづくりフォーラム(以下、フォーラム)は、名古屋市の代表的な都市公園である鶴舞公園や東山公園の花壇の管理や手入れを障害者と協力して行っています。花壇は、管理が丁寧に行き届き、色とりどりの花々が行き交う人を見惚れさせています。

フォーラムの活動の幅は広く、名古屋市港区にある自然庭園「名古屋港ワイルドフラワーガーデン ブルーボネット」(以下、ブルーボネット)を管理するほか、園芸福祉を地域に根付かせる「園芸福祉士」の養成講座の開催、障害者の就労支援など、様々な園芸福祉活動に取り組んでいます。

フォーラムの理事・事務局長を務める田村亨さんは、複数の福祉事業所と連携して活動し、農作業の指導なども行っています。障害者就労施設「社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮」は、フォーラムとともに、公園の花壇の手入れや、ブルーボネットの清掃を担当してきました。2020年からは、田村さんの指導を受けながら、本格的に露地野菜の生産を開始しました。

名古屋ライトハウス光和寮の主任職業指導員 松野裕一さんは、障害者たちの作業を見守り、一緒に作業をするなかで、障害者が農業に関わることの魅力や効果を実感しています。「都市部に住む利用者さん(障害者)が多いことや、普段の作業も室内が多いため、自然と触れ合うことで気分転換になっているようです。また、作物を育てている責任感から『また行かないと』と、積極性が高まり、



自発的に作業に取り組む姿勢も見られるようになりました。自分たちが育てたサツマイモを収穫したときは、本当に嬉しそうでした」



障害者の子どもを持つ親の不安から、園芸による自立支援を考えるように

2007年のフォーラム創設当初は、「だれもが花との触れ合いを楽しめるように」と、花壇の手入れを中心とした園芸福祉活動を行っていました。田村さんが農福連携を始めたきっかけは、障害者の保護者から「子どもが就職できずに悩んでいる」という声を多く耳にしたことでした。

「保護者のみなさんは『自分たちがいなくなったあと、子どもたちはどうやって生活していけばいいのか』と心配されていました。それまでは、『花を育て、愛でる喜びを体験してもらえたら』という思いで活動していましたが、保護者の声を聞いてから、『障害者さんの将来の暮らしを支えるために何かできないか』と彼らの仕事につながることを考え始めました。当時は、「農福連携」という言葉もなく手探り状態でしたが、公園や畑での農作業体験などの取り組みから少しずつ活動の幅を広げていきました」

園芸福祉士のサポートにより、障害者とのコミュニケーションが円滑に

農福連携の普及に向けて大きな一歩となったのは、2011・2012年度に県の委託を受けて実施した「農業分野における障害者雇用実証事業」です。園芸福祉士を複数の農家へ派遣し、障害者の就労を支援するほか、障害者の雇用に関する課題を発見して、雇用促進の提案を行いました。この事業で園芸福祉士を派遣した花き生産農家の「(有)H&Lプランテーション(代表 鶴飼敏之氏)」では、この取り組みがきっかけとなり、地域の福祉事業所から障害者を1名雇用したり、数名を研修生として受け入れたりしています。障害者には他の従業員と一緒に、苗ポットへの肥料置き、ポットの土入れ、並べ替えなど幅広い農作業を任せています。

障害者の雇用を始めたばかりの頃には、園芸福祉士が農家と障害者の間に入ることで、コミュニケーションを問題なく行うことができ、安定的な作業が実現。人手不足が解消され、作業効率が1.5倍ほどアップしました。

花き農家の鶴飼敏之さんは、「園芸福祉士の指導を見て、周りのスタッフもコミュニケーションのコツを学び、積極的に障害者さんと話すようになった」と、支援の心強さを実感。同時に、園芸福祉士の可能性に魅了され、自らもその資格を取得しました。

園芸って楽しいんだ 障害者が自立するための農福連携

農業のなかでも、「障害者が無理なく働きやすい」と言われる園芸。その理由は「単純な手作業が多いから」だけではありません。園芸福祉士としての顔も持つ田村さんは、園芸から始める農福連携の良さをこう語ります。

「花は五感で触れ合えるので、障害の種類に関わらず、だれもが楽しめるものだと思います。種まきから開花までの栽培周期が短く、頑張った成果が早く現れるため、障害者さんのモチベーションにつながりやすいと感じています」

園芸作業を体験することで、心身ともに良い影響が現れる人が多くいます。

「普段は車椅子生活をおくっている方が、花の手入れが楽しくて夢中になるあまり、知らないうちに立ち上がって作業をしていたということもあります」

田村さんは、「障害者さんが、園芸作業の得意なことや好きなことから始めて、将来的に農業が仕事となり、自立するための農福連携を広めていきたい」と語ります。



障害者が手入れしている花壇



まずは体験から始めてみませんか! 障害者と接すれば農福連携のハードルも下がる

障害者を受け入れている農家も増え、農福連携の理解は広がりつつありますが、推進する上での課題も見えてきました。

「障害の種類の違いや一人ひとりの症状の違いによって、どのような作業を任せるのが良いのか、どのように指導(コミュニケーション)すれば良いのか不安に感じている農家さんは多いです。障害者さんの立場になって考えないと、『頼んだ作業が上手くできていない』という結果になりかねませんので、分かりやすく伝える工夫が必要です。例えば、『40cm』という数字をそのまま伝えるのではなく、ものさしを見せながら説明したり、長さを視覚的にイメージできる道具を作成す



ることも必要です。慣れるまで時間がかかる場合もありますが、障害者さんと真摯に向き合う重要性を伝えながら、農福連携を進めていく必要があると感じています」

「興味はあるが、何から始めればいいのか分からない」と感じている農家や福祉事業所が多いのも事実。

「取り組む前からあれこれ悩みより、まずは簡単な農作業体験から始めてみるのが、良いでしょう。障害者さんと接してみれば、案外問題がないことに気づくはず。農福連携を進める上で不安があれば、気軽に相談してください。みなさんの課題に応じて、柔軟にサポートします」 “農福連携の良き相談者”になれるよう、田村さんの挑戦は続きます。

特定非営利活動法人 花と緑と健康のまちづくりフォーラム 名古屋市
<http://www.hana-midori-kenko.org/>

園芸福祉を始めた年	2005年に準備会を設立し活動開始
どういった方と取り組みを行っているか	高齢者、障害者や子どもを含むすべての人々
園芸福祉の取り組み内容	食育、花育、生涯学習等の教育、福祉ガーデン、福祉農園づくり、園芸福祉士養成講座、ボランティア養成講座、各種講演会の開催

社会福祉法人名古屋ライトハウス 光和寮 名古屋市 <https://nagoya-lighthouse.jp/kowa/>

展開事業	就労移行支援事業、就労定着支援事業
事業内容	障害者の方の就職支援、就職後支援
どういった障害の人が多いか	発達障害、知的障害
農福連携の作業内容	テーブルガーデン(花壇づくり、維持管理)、里山エリア(野菜苗植え、維持管理)
作業頻度	週2~3回